

試験研究成果普及情報

部門	病害虫	対象	普及
課題名： ネギ小菌核腐敗病の多発要因と防除			
[要約] ネギ小菌核腐敗病は、7～10月の気温が低く、11～12月の降水量が多い年に多発する。多発が予想される年には、10月以降、薬剤を株元に良くかかるように予防散布してから土寄せする。			
キーワード（専門区分）作物病害（研究対象）野菜類 - ネギ （フリーワード）ネギ、小菌核腐敗病、 <i>Botrytis squamosa</i> 、多発、気象、防除			
実施機関名（主査） 農業総合研究センター生産環境部病理研究室 （協力機関） （実施期間） 1986年度～2003年度			

[目的及び背景]

ネギ小菌核腐敗病(*Botrytis squamosa*)の発生は、年次による変動が激しく、1993年（1993年晩秋から1994年初春）のように全国的に大発生する年がある一方、ほとんど発生を見ない年も多い。そこで、過去の気象要因と本病の発生との関係を明らかにするとともに防除対策を確立する。

[成果内容]

- 1 ネギ小菌核腐敗病に侵されると、葉鞘に淡黄色の病斑が外葉から内葉へ進展し、ときに病斑部を中心に縦に亀裂する（写真1）。病斑上に2～5mmの暗褐色～黒色、楕円形～不正型で偏平～やや盛り上がった菌核を多数形成する（写真2）。
- 2 発病の適温は20℃以下で、千葉県では本病は11月頃から発生し、翌春の3月頃まで多発する。
- 3 胞子は、高湿度のとき多数形成され、土壌の水分が多いと多発する傾向がある（表1）。これらのことから、多湿条件は本病の蔓延を助長する。
- 4 耐久体である菌核は、インキュベータ内で40℃では2週間以内に、30℃では6週間以内に死滅したことから、暑さに弱いと予想される（図1）。
- 5 1986～2003年では1986年、1987年、1988年、1992年、1993年、2003年は多発生で、その他の年は少発生である。
- 6 7～10月の気温が低く、11～12月の降水量が多い年の冬に多発しやすい（表2）。発生はとくに気温との関係が大きい。
- 7 多発が予想される年には、10月以降、登録薬剤を株元に良くかかるように予防散布してから土寄せする（図2）。

[留意事項]

[普及対象地域]

ネギ栽培地帯

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]



写真1 ネギ小菌核腐敗病による葉鞘部の腐敗と縦割れ症状



写真2 葉鞘部表面に形成された菌核

表1 ネギ小菌核腐敗病の発生と土壤水分との関係

処理区	発病株率	含水率
多湿	54.2%	33.9%
適湿	29.2	25.7
乾燥	12.5	18.7

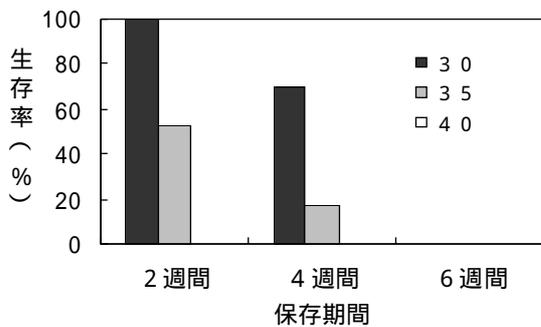


図1 ネギ小菌核腐敗病菌菌核の30～40における生存
(各温度のインキュベータに保存)

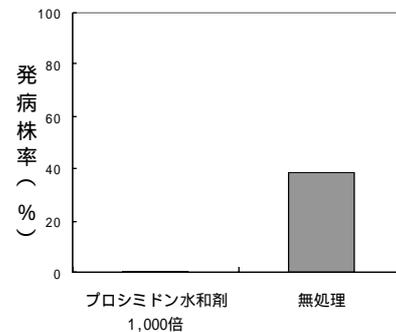


図2 ネギ小菌核腐敗病の防除
10月23日、11月7日、11月28日散布
3月25日調査

表2 7～10月の気温、11～12月の降水量とネギ小菌核腐敗病の発生

		11～12月の降水量	
		多い	少ない
7～10月の気温	高い	1987 、1990、1991、2001	1989、1994、1995、1997、1998、1999、2000、2002
	低い	1986 、 1992 、 1993 、1996、 2003	1988

多発年は太字・斜体

[発表及び関連文献]

TAKEUCHI, T. et al.(1998). Small Sclerotial Rot of Welsh Onion(*Allium Fistulosum*) Caused by *Botrytis squamosa* Walker. Ann. Phytopathool. Soc. Jpn. **64**. 129-132.

竹内妙子・梅本清作(2003). ネギ小菌核腐敗病の発生要因. 千葉農総研報 **2**. 29-34.